

# 地域の人々

## — 愛着対象とストレンジャーの間

神戸山手大学現代社会学部 教授  
矢野のり子 (やの のりこ)

### Profile — 矢野のり子

京都大学教育学部卒業、奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了。学術博士。佛教大学心理研究センター、大谷大学を経て現職。京都市乳幼児健診心理相談担当。専門は発達心理学、臨床心理学。主な著書は『教育の根源』（分担執筆、晃洋書房）、『現場の学問・学問の現場』（分担執筆、世界思想社）、『意味の形成と発達』（分担執筆、ミネルヴァ書房）など。



### はじめに：ストレンジャーとは何者か？

子どもの社会的発達をみていくとき、二者関係、とりわけ母-子関係だけをみていくだけでは不十分であることに異論はないであろう。とはいえ、対人関係の発達においては、乳児期の愛着の対象（母親）を中核としてその変容と拡大をみていくことが重視される。そしてここでいわれている母親とは第一養育者であり、必ずしも血縁関係にある母親のみを指定しているわけではないことも種々検討されてきている（Schaffer, 1977；Stern, 1985）。

一方、母親との愛着形成と並行して人見知り反応は生じる。人見知りとは、一般に7、8ヵ月以後に知らない人に対して不安や恐れを抱く現象である（Spitz, 1962）。エインズワース（Ainsworth, 1978）は、生後1年前後の乳児の母親への愛着の質を実験により測定した。ここで問われているのは、情緒的絆としての愛着の側面だけでなく「特定の対象を安全基地として利用できるかどうかという行動システム」である。ストレンジ・シチュエーションと呼ばれる乳児にとって困難をとまなう新奇な場面と人（ストレンジャー）が刺激として提示される。つまりここでのストレンジャーは乳児にとって危機的でストレスフルな他者であるということになる。

愛着対象とは、恐れ、不安を低減し元に戻そうとする接近性をともない、それにより安全の感覚が得られる（Bowlby, 1969）身体性をもった人である。そして、ストレンジャーもまた声と体温をもった人であるはずである。子どもは

母親との関係だけに閉じ込められているわけではない。日常的にさまざまなストレンジャーに会っている。子どもは自分の生活領域に入ってきたストレンジャーを恐れ、拒否するというリアクションを示す。同時にそのストレンジャーに対する好奇の念も抱く。未知の対象は好奇心をそそり、同時に不安や警戒の念を抱かせる。

生後7、8ヵ月の乳児は興味と恐れが入り混じったあいまいな事態に出くわしたとき、養育者とのアイコンタクトを求め、表情の読み取りを行う。それを手がかりにその事態に接近するか回避するかを決めようとする。ストレンジャーが好意的にふるまったり、子どものほうが相手の行動を制御できれば、子どものほうから交渉を始め、母親を安全基地として媒介しながら対人関係を広げていく（Stern, 1985）。こうして子どもは自我の領域にストレンジャーを関わらせていくのである。特筆すべきは、一般的な他者である不特定多数の人々に対して子どもが人見知り反応を示すわけではないことである。人見知り反応は、乳児の生活圏に近づいてきたあるストレンジャーに対しての反応である。

対人関係の発達を論議するとき、愛着のあり方について盛んに研究されてきているが、ストレンジャーについてはあまり検討されてこなかったように思われる。ストレンジ・シチュエーションにおけるように、ストレンジャーが乳児にとって危機的でストレスフルな他者であるのなら、以下の問いが生じる。①ストレンジャーというのは誰のことを指し示しているのか？②

特定のストレンジャーが危機的でストレスフルであるのならその人はどういう人なのか？

本稿では、子どもが生活世界においてストレンジャーをどのように認知し、自我領域に布置していくのかという観点から対人関係の発達をみていきたい。また、ストレンジャーへの好奇心な関心は子どものなかでどのように発達していくのかについてもみていく。ここでは子どもの身近にある地域の人々を中心にとりあげる。

## I 幼児期

### I-1 幼児前期：他児の存在

筆者（1998）は、長男である2歳男児における他児の存在について観察データから検討した。それによると、男児はいつも遊んでもらい、保護的にふるまう2歳以上年長の男女児2人に対しては、母親がいなくても何時間か遊んでいることができた。同年齢児との葛藤状況を和らげる母親との中間基地としての愛着を示した。一方、10ヵ月程度年長、および年少の同年齢集団の幼児に対しては強く惹かれる同一視の対象であり、一方で攻撃行動をしたりされたりする葛藤的な関係でもあった。幼児前期のこの時期には子どもへの関心は強いが近所の大人への関心は継続的ではない。

### I-2 幼児後期：特定のストレンジャーへの興味

記号的意味を獲得した3歳以降の子どもは、言語によって自己と他者の関係を理解しようとする。幼児後期になると、子どもは近所の人々のなかに、直接関わりをもち愛着の対象となる親しい大人（よく遊ぶ友達の母親や自分の母親の親しい人）以外にも興味を惹く大人を見出す。そして興味ある人物（特定のストレンジャー）を自己中心的にとらえていく。

筆者の次男は、4歳10ヵ月のとき団地の同じ棟に住む、恰幅のよいオピニオンリーダー的な中年女性が同じ棟でいちばん古くから住んでいる人だと筆者から教えられると、「ソシタラ○ゴウトウノヒト ミンナ ○○サンノオバチャンカラ ウマレタン？」ときいている。また、4歳11ヵ月のクリスマスのころ、やはり同じ棟にいた大柄な鬚を生やした中年後期の男性

について、「アノヒト ガイコクノヒト？ キット サンタクロースヤト オモウワ」と言っている。そうして身近ではあるが愛着対象ほどではなく何度か会った近所の人々を推理し、自分の自我の領域と結びつけようとしているのである。それは、自分の知っている絵本やTVから得られた知識との結びつきでもある。

概念を獲得し始めると、子どもはことばで自分とその人物の関係を整理しようとする。ファンタジーや遠い外国の人と結びつけたりする。あるいは誕生と死への関心をもち始め自己の歴史を紡ぎ出したこの時期、特定の他者を1対1対応で自分と関係づけようと試みる（矢野、2000）。しかし、好奇の念が増す特定のストレンジャーであってもその他者はあくまで少し遠い謎の存在である。まだまだ安定して中間的な距離をもってとらえられていないようにも思われる。その人は困難をもたらす人かもしれない、興味と恐れが入り混じったあいまいな事態について、母親とことばでの確認を求めているのである。確認を求めながら自分で外界を分節化し、自己中心的に物語るといってもよい。幼児期においては、他者と他者を関係づけて俯瞰的にかつ一般化して人間関係をとらえていくことは難しい。

## II 学童期：愛着対象とストレンジャーの間の人々

学童期になると、子どもは体験的で具体的な思考の世界から知識と概念形成による表象的な

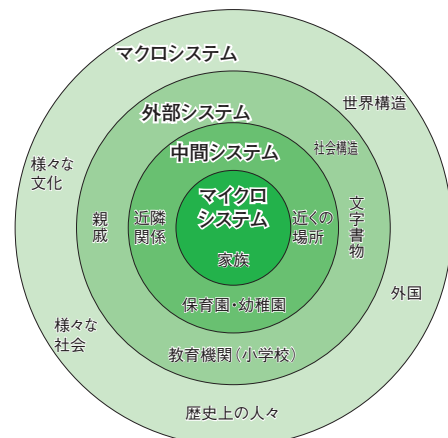


図1 子どもを取り巻く社会的エコロジー環境の構造 (Bronfenbrenner, 1979) より筆者作成

思考の世界へと大きく展開していく。幼児後期には、自分が体験のなかでもった知識と外から与えられた知識を折り合わせていくための自己中心的な物語が必要であった。しかし、学童期になると所与の知識は知識として思考の世界に措いておける。自分をも対象化してみることが少しずつ可能になる。それは地域を鳥の目をもって地図として概観することが可能になることでもある。地域の人々は自分との関係の濃淡をもった他者として布置されていく。

筆者(2008)は、大学生32名(男10名、女22名)を対象に小学校の通学路の地図を描いてもらい、そこから通学路のイメージとそこにおける体験と随伴感情について検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

1 男女とも全員が川や畑といった風景や公園、郵便局、店屋等の建物を手がかりに地図を描いていた。道だけ描いた者はいなかった。男子は視覚的想起によって地図(建物と風景のみ)を描く傾向があり、女子は木や花、動物、人も描く傾向があり、音や匂いといったプリミティブな感覚を随伴して想起する傾向が強い。

2 随伴感情については、20名が通学路に快感をもっており、想起内容数が多く、豊富である

表1 随伴感情

	快感	特別な感情をもたず	不快感情	計
男	3	6	1	10
女	17	4	1	22
計	20	10	2	32

ことと快感の相関が示された。建物と風景のみの地図を書いた10名が特別な感情を抱いていない。不快であったのは2名で、道が一本線で描かれており地図記号により公的施設が描かれたただけであった(表1)。

3 エピソード記憶を書いたのは21名である。そのうち12名が「犬にかまれた」、「どぶにはまった」といった痛みをとまなう不快な体験であったが、「今はなつかしい」と訴えている。また、怪我したとき近くの人や友達の家で治療してもらったという者が4名いた(表2)。快感をとまなう体験を書いたのは9名である(表3)。快感、不快感情にかかわらず、通学路におけるエピソード記憶のほとんどが道草にかかわるものであった。

本調査から浮かび上がってくるのは、学校における限定的な人間関係ではない通学路における人々(友達の家族も含めて)との触れ合いである。地域の人々は不特定多数のストレンジャーではなく、いつも決まった場所に決まった人がいるという安心感をともなっている。児童期

表2 想起された(当時)痛みや不快感情をとまなうエピソード記憶

- 1) 田んぼで友達とが年下の子と落とし合い。田んぼに来たおじさんに叱られた。(女)
- 2) 幼稚園横の田んぼに友達がはまって、助けようとした私もはまって幼稚園の先生に2人して助けられた。(女)
- 3) 鉄棒から落ちて学校の前の病院に行った。(男)
- 4) 川で遊んでたら靴が水にぬれてしまった。岸で乾くまで待っていた。(男)
- 5) ケンカする声が聞こえた。(女)
- 6) はんこ屋の前でたまたまにたき火をしていて、臭くて鼻つまんで通りすぎた。(女)
- 7) よく吠える犬がいて、側まで行ってわざと吠えさせた。(男)
- 8) 途中で犬にかまれて、家に帰って病院に行った。(男)
- 9) 団地から出て行くと林になっていて、木がザワザワと音がした。夕方はちょっとこわかった。(女)
- 10) 通学途中に転んだとき、おしいちゃんと弟が行きつけの散髪屋で薬をつけてもらった。(女)
- 11) すり傷をつくった。葉っぱで手を切った。友人が家に連れて行ってきてバンドエイドくれた。(女)
- 12) 工場の裏に老犬が繋がれていた。何かかわいそうだった。いつも大丈夫かなと思っていた。(男)

表3 想起された(当時)快感をとまなうエピソード記憶

- a) 1時間毎に曲が鳴る時計があった。(女)
- b) ●●川っていう川で石を落として遊んだ。(男)
- c) いつも歌ってるゆかいなおじさんがいた。(女)
- d) ガンリンスタンドのおにいさんはすごくさわやかで、毎日あいさつしてくれた。(女)
- e) さくらちゃんという犬がいた。行き帰り毎日触っていた。(女)
- f) 友人宅の犬に触っていた。(女)
- g) 草むらで帰り道よく遊んでいた。(男)
- h) 小学校の裏山にたまたまキツネが出るので、わざわざ遠回りして見に行った。(男)
- i) ある場所でUFOを見た。もう一度見に行ったら、見えなかった。男の子何人かで見に行った。(男)

の子どもにとって地域の人は、愛着対象とストレンジャーとの中間的な心理的距離をもつ人々といえる。小学校は時間と空間が構造化された場所である。学校は囲われて学ぶところであるが、通学路は一種の解放の場でもあり家庭と学校の狭間としてのあいまいな空間といえる。本調査から示唆されるのは、グレーゾーンである通学路におけるリスクや負の体験が許されている事実である。危機をともなった活動にチャレンジすることで子どもの世界は広がる。生活世界を広げていくときはリスクや負の体験がつきまとうといってもよい。そして、いつもはそこにいるだけの地域の人々が危機的状況のときは何かしらの援助をしてくれたという体験である。

### おわりに

日常生活において子どもはさまざまなストレンジャーに幾重にも囲まれて暮らしている。あらゆるストレンジャーが安全を脅かす人であり、全てに人見知り反応を示さねばならない世界に人は生きてはいけないう。そして、生活圏で出会う多くの人が愛着対象である世界もまた息苦しいように思われる。

地域の人々は基本的には、そこにいるだけの存在である。ある人はちょっと安全を脅かす存在であるかもしれないが、侵入的ではないしやり過ごすことが可能である。そして時々声は声を交わし、危機的状況のときは援助の手を差し伸べてくれる人々である。こうしたゆるやかな関係をもつ中間的な心理的距離の人々を持つことこそ社会化であると思われる。

こうした社会化は、他者から見られる自己を規定していくことでもある。児童期に子どもは、自分もまた相手にとってかけがえのない存在だけではなく、不特定多数のストレンジャーであり、あるいは中間的な距離をもつ他者であるのだという対象化を少しずつしていかなければならない。愛着対象である親友は1人か2人存在すればよく、友達100人はできないであろう。また、先生は1対1でいつも自分をみてるわけではない。担任の先生もまた、愛着対象である側面と中間的な他者である側面ももっている（矢

野, 2010)。やがて迎える思春期の親離れ子離れのときには、お互いのなかに他者を強く意識し、自分をも他者をも対象化しなければならなくなる。そうしたとき、ゆるやかで中間的な人々は救いとなるように思われる。

史子はふと思った。親が直接子にしてやれることって少ないのかもしれない。何かしてやろうとすると、立ちはだかってしまうようなところがある。(中略) 今、自分はよその子と並んで、夜の底に横たわっていると史子は思った。夏実はどこにいるのだろうか。夏実の傍らにも、誰かいてやって欲しい。(中略) もしかしたら自分のような親が、あちこちに点のようにいるのではないだろうか。この日本じゅうの土が地続きで、同じ空気を吸っているのなら。(干刈あがた『黄色い髪』より)

### 文 献

- Ainsworth, M. D. S. et al. (1978) *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Bowlby, J. (1969) *Attachment and loss: Vol. 1, Attachment*. New York: Basic Books.
- Bronfenbrenner, U. (1979) *The ecology of human development*. Cambridge: The Harvard University Press.
- 干刈あがた (1987) 『黄色い髪』朝日新聞社
- Shaffer, H. R. (1977) *Mothering*. Cambridge: Harvard University Press.
- Spitz, R. A. (1965) *The first year of life*. New York: International Universities Press.
- Stern, D. N. (1985) *The interpersonal world of the infant*. New York: Basic Books.
- 矢野のり子 (1998) 最接近 (rapprochement) 期における他児の存在について. 『佛教大学臨床心理学研究センター紀要』第3号
- 矢野のり子 (2000) 「自己の歴史性：誕生と死への関心」岡本夏木他 (編) 『意味の形成と発達』ミネルヴァ書房
- 矢野のり子 (2008) 通学路のイメージとそこにおける個人体験. 第51回日本教育心理学会総会発表論文集
- 矢野のり子 (2010) 「教育とコミュニケーション：ひとり言から内言へ・書きことばの獲得」川村覚昭 (編) 『教育の根源』晃洋書房